

信 毎 歌 壇

米川 千嘉子 選

三日に一度小松菜五キ口を西駒ヶ岳のライチョウの雛に友は届ける (宮田村) 小田切孝子
 菜の花の丘で菜の花給食をせし学校の閉じる日近し (飯山市) 市村紀久子
 実家にて「うる星やつら」を見付けし子わが「のらくろ」と出合ひしやうに (長野市) 原田 浩生
 画面から注文してもいいけれど本に囲まれたくて来ました (松本市) 川村 聡子
 万博に人間洗濯機現る!?心の洗濯を頼みたし (須坂市) 高橋 都子
 デニッシュにのせる果実を選ぼうあなたと夏の絵日記を書け (松本市) 飛 和
 朝陽浴び日毎ふくらむ稲の乳すずめが狙う網をくぐりて (飯綱町) 小林 紀子
 本当の心配事は話せない仏壇の夫に今日もつづやく (長野市) 島田 怜子
 トマト割れ胡瓜も茄子も味うすし三十五度の日照りは続く (長野市) 小白向栄子
 海象がシヨウの途中に忽然とおじさんみたいにグガーと欠伸 (小諸市) 加藤 陽介

佳作
 西日受け山のポストへ投函すこれが大好き空振りだとして (上田市) 小林さよ子
 小鳥等の落とし文かや門先に山百合の花気高く咲きて (佐久市) 岩下 悦子

選評

第一首、山頂のケージに保護されたライチョウ。1カ月後雛28羽を含む6家族が放鳥されたという。具体も生き生きとしている。第二首、唱歌「朧月夜」の風景とされる菜の花公園の中の小学校。懐かしい風景の中に若い作者もいた。第三首、親の愛読書? を見つけて夢中になる。二つの漫画のタイトルが時代を象徴して楽しい。第四首、本屋さんの空間を愛する気持ちが優しい文体ににじむ。

小池 光 選

爺さまと植えし馬鈴薯ホクホクと口に広がる朝の味噌汁 (長和町) 羽毛田 栄
 六号のケーキに九十七本のろうそく父を驚かさなか (長野市) 原田りえ子
 新しいビジネススーツの青年は和菓子を二つ恥じらひつつ買ふ (飯山市) 市村紀久子
 掃除機の音に紛れて亡き父の呼ぶ声聞こえふと振り返る (大町市) 小西 美恵
 従軍看護婦時代を問われ語るとき老女は二十歳の乙女にかえる (千曲市) 上原 博司
 留守のまに友が届けし野の花は施設に向う最後のあいさつ (松本市) 井刈 紀子
 カマキリにかまれてみたよ幼いから痛くなかったよ顔かわいいよ (飯綱町) 小林 紀子
 「村一番長生きせよ」と言ひたれば妻はうなづき「君もね」と言ふ (上田市) 甲田 隆登
 子育てに迷へる日々もいつか去りひとりながめる夕あかね空 (長野市) 北沢 京子
 山寺の夜のライブに蝉が来て一緒に歌う「夏の思い出」 (松本市) 興 絹枝

佳作
 終戦後七十八年慰霊碑に父の名見つけて父恋ひてをり (小諸市) 塩川 篤子
 秋祭りお囃子の音は四年ぶり一人娘の里帰り待つ (木島平村) 幸野 隆一

選評

第一首、老夫婦が丹精込めて作ったジャガイモ。これ以上貴重でおいしいものはない。朝の味噌汁、さぞうまかったことだろう。第二首、6号のケーキとはどれくらいのものか評者は知らないが、97本のろうそくとはものすごい。父親ならずともびっくり。第三首、両親へのおみやげであろうか。恥じらい込めて和菓子を買う青年。実に初々しい。第四首、掃除機の音のなかにふと父の声が。

小島 なお選

合宿の学生は去り静けさの雲の耀ふ村に夏果つ
 (伊那市) 中村 初治
 となりにて若者も長く立ち読みす雨の小昼の古書
 店の隅 (長野市) 近藤 光子
 リンスがないと女子騒ぎをる信州の民宿「べガ」
 の合宿の夜 (小諸市) 加藤 陽介
 世帯主となりたる友はごみ袋に太マジックで己が
 名を記す (飯山市) 市村紀久子
 みな若く幼も居れば切なくて追憶を止め寝返りを
 打つ (松本市) 沢 秋人
 わがものごとくわがものならざりし吾子を見送
 る夕焼けの沁む (千曲市) 中村 美樹
 不注意で本にコーヒー零したら「記念にします」
 君は言うなり (長野市) せきたつお
 血の病克服をして生きのびしその人の描く雪の街
 並 (上田市) 金子 友晴
 夕食の後片づけはわが当番皿や茶わんの傷み気
 なる (上田市) 宮下 忠
 満開の我が家フェンスのアサガオをスマホで写真
 撮る人多し (伊那市) 赤羽 正彦

佳作
 盆終えて持ち場に帰りし子へ孫へ絵手紙を描くう
 ろし雲添え (上田市) 小林さよ子
 ポテサラが特別うまくできた夜誰も何んにも言わ
 ずに食べる (松本市) 川久保恵子

選評

第一首、騒がしくにぎやかな合宿のシーズンが終わった。すこし広くなった空をゆく雲の無音の輝きが静けさを深くする。第二首、本の時間と現実の時間のあわいに並ぶ偶然の2人。外の雨音と古本の匂いに包まれながら。第三首、華やかな声が風呂の香りとともにどこまでも響いてゆきそう。「べガ」の名もまぶしい。第四首、夫を亡くした友。寂しさや責任をはねのけるような太マジックが頼もしい。

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹選

纏ふ結に秘めたる心透けぬかと (佐久市) 大井 悦子
 空蟬よあれはお前の声なのか (佐久市) 中山 和子
 蚯蚓鳴く短波放送聴く夜更け (松本市) 辻 佳代
 胸に手を眼は空へ震災忌 (埼玉真美里町) 飯野佳代子
 カマキリの逆三角の顔怪獣 (飯綱町) 小林 紀子
 鳳仙花種はどこまで行つたやら (長野市) 宮沢 信博
 揺れる草色なき風の通り道 (佐久市) 町田ゆかり
 案山子一家車通るを見てをりぬ (上田市) 竹内 創造
 しかたなく我に止まれり赤とんぼ (塩尻市) 長 泰裕
 少年に獣の匂ひ夏の果 (飯山市) 田中 琢雄

佳作
 死の数と競ふほどなる天の川 (辰野町) 有賀 健
 夫の墓所やうやう決まり虫しぐれ (富士見町) 鬼束 淳子

選評

一句目、「結」は夏に着る単衣のこと。「うすもの」とも呼ぶ。薄く透けているものも。女性の恋心も透かしているのかも。それが心配なのも女心。二句目、空蟬は蟬の抜け殻。それが無念に地上に転がっている。しかし今鳴いている蟬声はこの空蟬のものかも。三句目、果たして蚯蚓が鳴くのかは分からない。しかし遠い所からの短波放送を聴く夜更けならばさぞかしそれも鳴くのだろう。

今井 聖選

除草機の稼働に見惚れ佇めり

(長野市) 宮沢 義親

秋桜百戸南を向きしまま

(辰野町) 有賀 健

六年間リレーの選手赤蜻蛉

(箕輪町) 柴 和夫

焼き魚酢橘絞るも尻尾から

(松川村) 中野 重行

焼秋刀魚背からほくすは父譲り

(佐久市) 吉岡 徹

つややかに煮えし金時秋の朝

(松本市) 橋倉佐代美

蝉の穴ねぎらふやうに雨静か

(須坂市) 丸山 英子

魚籠持たず釣果スマホに山女釣

(佐久市) 西田 和彦

思春期のうつく揺れるる秋桜

(小海町) 依田 久代

泥団子つやつや並ぶ秋夕焼

(須坂市) 東島賀代子

佳作
改札に懐かしき顔休暇明

(松本市) 伊藤 和夫

夕涼み母が遺せしオルゴール

(須坂市) 牧野 勇水

から小学校の運動会でのことだろう。リレーは運動会の華。この選手、ずっと喝采を浴びてきたのだ。四句目、焼き魚の尻尾から酢橘を絞る。そんなことも作者のルーティンの一つ。

一句目、機械の動きというのは時に目を引くものである。そのことを直截に詠んでいる。二句目、整然とした風景がコスモスの中に出現する。それもまた美的な構成と言えよう。三句目、6年間だ

選評

神野 紗希選

ツイゴイネルワイゼン罪のごと酷暑

(松本市) 森山 昌子

冷まじや地下へ地下へと人間史

(小諸市) 加藤 陽介

長き夜を短き詩もて繋ぎをり

(塩尻市) 吉蔵 林生

アルプスに乗る有明の月まどか

(長野市) 西本 ゆき

琵琶湖の水澄めりと友の便りかな

(富士見町) 鬼束 淳子

八十の父が父恋ふ星月夜

(佐久市) 真山 邦弘

留学を切り出す海や月を背に

(三重県伊勢市) 藤田ゆきまち

犬だつて一人言う残暑かな

(佐久市) 水間喜美子

スーパーブルームーン地下壕より母子供

(松本市) 小林 幸平

先生が触れて教へるねむり草

(安曇野市) 平 至行

佳作
天竜の風呼び起こす夜の秋

(伊那市) 中村 初治

ころころと藪の中から秋の声

(佐久市) 新地 章倫

潜った。手塚治虫「火の鳥 未来編」のように、人類の所業で地上に住めなくなる日も来るのかも。人間史の未来が怖い。三句目、対比させることで、秋の夜の長さ、俳句という詩の短さがしみじみ迫る。

一句目、この夏の激しい酷暑は、サラサーテ作曲「ツイゴイネルワイゼン」の劇的な旋律のようにわれわれを責めた。地球を顧みない人間への罰。二句目、人類はときに厳しい気候や戦火を逃れ、地下へ

選評